

平成26年3月1日  
大分県農林水産研究指導センター  
農業研究部

果菜類の灰色かび病の防除について

本年2月の豪雪以降、低温で推移し、施設の密閉により施設内が多湿状態になり、果菜類の灰色かび病が多発している施設がみられます。現在の発生が少ない場合でも、発病後の進展は早く防除は困難になることから、発生前からの予防を心がけましょう。

1 発生状況と今後の予想

(1) 2月中旬の巡回調査では、冬春トマトの場合、発生圃場率は平年並で、発病葉率は平年より高かった。イチゴの場合、発生圃場率はやや高く、発病果率は平年より高かった。

○冬春トマト

発生圃場率 : 20.0% (平年: 19.1%、前年: 30.0%)

平均発病葉率 : 1.4% (平年: 0.6%、前年: 1.0%)

○イチゴ

発生圃場率 : 10.0% (平年: 8.2%、前年: 11.1%)

平均発病果率 : 0.3% (平年: 0.2%、前年: 0.3%)

- (2) 2月以降曇天や降雪日が続いたため、一部で発病の進んだ圃場が認められる。
- (3) 施設栽培においては、経費節減のためハウス喚気が不十分であったり、暖房機の稼働が抑えられたりすると多湿条件になり、発生の拡大が予想される。
- (4) 本病は20℃前後の気温と多湿条件で発生が助長されるが、向こう1ヶ月の気象情報によれば平均気温は平年並または高い確率40%、降水量は平年並の確率40%と予想され、引き続き発病に好適な条件が続くと予想される。

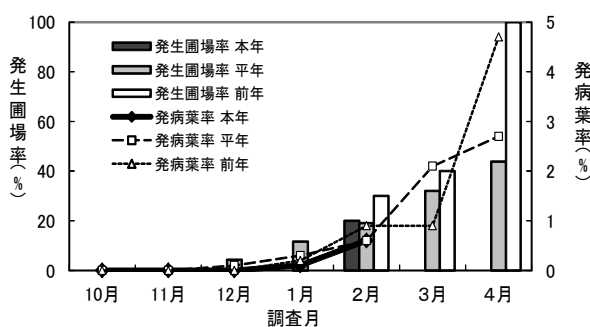


図1. 冬春トマトでの発生推移

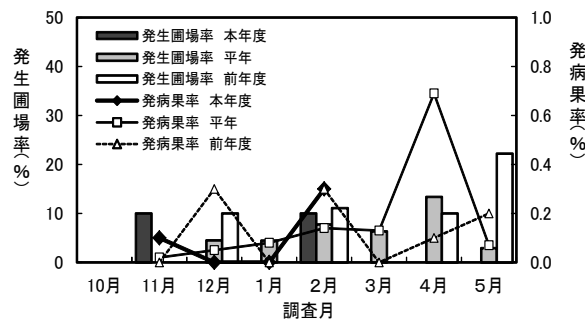


図2. イチゴでの発生推移

2 防除対策と注意事項

- (1) 可能な限り換気を図るとともに、暖房機の送風や攪拌扇等を利用し、通風に努める。
- (2) 発病果や発病葉は伝染源となるので、見つけ次第ハウス外に持ち出し、土中に深く埋める等、適切に処分する。
- (3) 晴天日の日中に防除することが望ましいが、曇雨天時の防除については液剤の使用を控え、くん煙剤等を使用すると過湿防止に有効である。
- (4) ボトキラー水和剤のダクト内投入を行っている場合でも、発病を認めた場合は治療効果のある薬剤を散布し、少発生条件を維持する。
- (5) 同一系統薬剤を連続使用しないようにし、系統の異なる薬剤とのローテーション使用を行う。
- (6) 防除薬剤は、大分県農林水産研究指導センターホームページ内にある「大分県主要農作物病害虫及び雑草防除指導指針」 (<http://www.jppn.ne.jp/oita/>) を参照し、農薬使用基準（使用時期、使用回数等）を遵守する。